

こぼれてむさし、まだ一、二本残りもありしまでは熱き物を食うたびには、思わず知らず息吹きかけてさますことありしかとみえ、そのころまではさして心付かざりしが、残らず落ちて後はやわらかき物も一寸唇にてくわえ食うこと故、その熱き物なればその熱きにたえず、食事の度毎に火傷せぬ日はなきようなり。

麺類などはやわらかにして食しやすきはすなれども、これもちよっと歯にくわえ吞込まざればならぬものなり、さるによりてこれも心に叶わず、食うに不自由なれば強く望まず。況んや魚肴はその骨を舌にて探り食わねばならぬものなるに、その相手となる歯なければすべきようなく、もしこれをむさばらば骨咬の患いを起こさんと思えば食わざるがましかとあきらむる事多し。

すでに入歯を作りて用いし事ありしに、もの食うため、もの言うためには少しよきようにも覚えたけども、下地をつげの木にて作り、余程大なる物故いかようの上手に作られても馴れぬうちはいとうるさし。

又これを忍びて用いるも、もと自然の物ならねば養の為にならぬようになり。又よく馴れしと思えば木目立ちて舌に触わり、常に苔ある舌の心地にて、物の風味よろしからず、殊に人々おのれおのれの口中自然臭（口臭）あるものなるに、かかるものを新に作り添うるの常に違うところ出で来る故にや、快からず覚ゆるなり。

老いては誰も食事のたびにむせやすきものなるうえに、入歯これありてはむせることますます甚しきようになり、兎にも角にも不自由言わんかたなし。さて物語するに、その五音の中、歯音欠くる故その接語の不便もっとも甚しきものなり」

歯科に於ても老人保健が問題となる今日、老人歯科は避けて通れないが、自ら老境を体験した歯科医は少ない。

ここに、医人、杉田玄白の老人保健体験記のうち、老人保健の記述を詳報して大方の参考に供する。

25) 疱瘡神のお詫び証文の時代考証とその原典と思われる談議本について

A Study on the Letters of Apology Written by Five Deification of the Smallpox

新藤 恵久
○長谷川 弥

Yoshihisa Sindou & Hisashi Hasegawa

疱瘡神のお詫び証文という、世にも不思議な古文書が、関東地方の各地で発見されており民俗学的に注目されてはいたものの、疱瘡除けの呪符として民間信仰研究の対象、あるいは郷土研究者の格好の研究対象となされていたが、古文書としては雑文書扱いであまり重要視されてはいないのが実情である。千葉県、茨城県、栃木県に残されている疱瘡神の詫び証文を調査してみたところ、いずれも申し合わせたように、「疱瘡神五人より相渡申候誤証文之事」という文書名で、差出人は疱瘡神五人の連名で、宛名人は若狭国小浜、組屋六郎五衛門もしくは、組屋六郎右衛門、あるいは姓の方も餅屋とか、紺屋とかの違いはあるにしても大差はない。

茨城県麻生町手賀家に次のような詫び証文が伝えられている。

疱瘡神五人より相渡申誤証文之事

一、我等共、往古より世上一統為流行候処、或者大酒被酔、又者軽為致疱瘡重為致す候段我等之心得違、且又笹酒等相済候後、七十五日之内、食餅杯相障り腹中瀉、一旦仕舞候疱瘡再発為致、不屈之至、誤入奉畏候事。

一、別而、松皮之類自今急度相止、蜀黍辺ニ仕、富士山之様山為上可申候事。

一、序病より本服迄之内、笹酒出済候迄、尚溢レ事並やく躰無之戯言為致申間敷事。

一、疱瘡仕舞不申候内、如何様之痒気有之候共、猥ニ為搔申間敷候。尤蚤虱に被喰候共、堪忍いたし可申候。若其軽痒気有之候共、急度手ニ而条々ヲ撫置可申候事。

一、貴殿名前書付有之門ニハ、悪舗もの共眼ニ茂為見申間舗候事。

右之趣、以来急度相守可申候。自今、何方之子成共、みちやくちや不及申、成人之後邪魔成様成寄跡出来候ハバ、何様之御咎御仕置被仰候共、其

節、一言之儀申上間敷候、為後日誤証文如件。

長徳三年酉五月	丈七尺山伏	印
	廿二三静成男	印
	七十斗乞食老	印
	十七才振袖女	印
	五十斗鞆額男	印

若狭国小浜

餅屋六郎左衛門殿

以上のような文面であり、ここで問題となるのは、長徳3年酉5月と記載されている年号である。長徳3年といえば西暦997年であり平安時代の中頃であるにもかかわらず、文体は徳川幕府が公文書に採用した、和漢混交の候文で、一つ書きの文体でしかも江戸時代用語を随所に使用して書かれており、時代的には江戸時代のものであることは明確である。そこで演者等は、これらの疱瘡神の詫び証文の時代考証を試みると共に、何の目的で誰によって書かれたものかを調査検討をしていたところ、原典と思われる談議本、「八景聞取法問」疱瘡の寄の跡の項目に見つけることができたので、これらについて述べてみたい。

26) 黄帝内経素問にみられるヒトの一生と歯牙との関連について

The correlation between humam's life and teeth in Kotei-Daikei-Somon

RSA スポーツ歯学研究所,
藤井歯科, 吉川病院歯科部 藤井 佳朗

Yoshiro Fujii, RSA Suports Dental Institute,
Fujii Dental Clinic, Yoshikawa Hospital
Dept. Dent

人の歯牙は、加齢とともに進行する歯槽骨の吸収により、動揺、脱落の道を進むことが多い。中医学や漢方医学にとって、根本的な医学経典といわれる黄帝内経素問では、身体側の因子、とくに「腎」の機能低下、いわゆる腎虚に注目している。

黄帝内経素問、上古天真論、第一より

帝曰、人年老而無子者、材力尽耶、将天数然也。岐伯曰、女子七歳腎氣盛、齒更髮長。二七而天癸至、任脈通、太衝脈盛、月事以時下、故有子。三七腎氣平均、故真牙生而長極。四七筋骨堅、髮長極、身体盛壯。五七陽明脈衰、面始焦、髮始墮。六七三陽脈衰於上、面皆焦、髮始白。七七任脈虚、

太衝脈衰少、天癸竭、地道不通、故形壞而無子也。丈夫八歳腎氣実、髮長齒更。二八腎氣盛、天癸至、精氣溢写、陰陽和、故能有子。三八腎氣平均、筋骨勁強、故真牙生而長極。四八筋骨隆盛、肌肉滿壯。五八腎氣衰、髮墮齒槁。六八陽氣衰竭於上、面焦、髮鬢頒白。七八肝氣衰、筋不能動。天癸竭、精少、腎藏衰、形態皆極。八八即齒髮去。腎者主水、受五藏六府之精而藏之。故五藏盛、乃能写。今五藏皆衰、筋骨解墮、天癸尽矣。故髮鬢白、身体重、行步不正、而無子耳。

歯牙に関する部分を要約すると、女子は7歳で腎気が盛り上がり永久歯が生えてくる。21歳で、腎気が完全に身体全体に行き渡り、親知らずが生え、歯が生え揃う。35歳以降、次第に衰えてゆく。

男子は8歳で腎気が充満して、永久歯が生えてくる。24歳で腎気が生体のすみずみまでゆきわたり、所詮腎気は完全の域に達し、親知らずが生え揃う。40歳で、腎気が衰えはじめ、歯も悪くなり始める。64歳で、歯は脱落してなくなってしまう。

「腎」とは「精を蔵し、成長・発育・生殖を主る」もので、生命体の発生・成熟・老化に関与している。精とは生命体が本来的に備えている生命エネルギーの基礎物質と考えられている。生来そなわった「先天の精」は、脾胃で消化吸収された栄養物質の精選された部分である「後天の精」によってたえず補充されると考えられている。したがって、歯牙の誕生から脱落までの過程を含め、ヒトの成長や老化に「腎」の機能が大きく影響していることがわかる。

つまり、歯周疾患進行に関して、腎の機能低下いわゆる腎虚の状態が宿主側の病態増悪因子であることが示唆されており、六味丸などの補腎薬は、歯槽骨吸収をとまなう中年以降の慢性歯周炎治療に有効であることが示唆される。歯周病の発生進行には宿主因子が関連しているが、宿主に対するアプローチは遅れているように思われる。こうした中で、全身へのアプローチを治療の中心とする東洋医学の役割が、重要な意義をもつと思われる。その意味からも古典な調査追求し、現代医療に生かすことこそ、医史学の最重要目的のひとつといえるのではないだろうか。